

2023年2月5日 説教「泣き出したエリシャ」

列王記第二 8章 7～15節

8章1～6節にはシュネムの女が疎開から帰り、王に失われた家屋の事などで直談判し、戻しの手配をされるという主の備えの出来事を学びました。

今朝の聖書箇所背景としては、イスラエルの北にあったアラムとの関係は落ち着いていた時期です。

1. アラム王ベン・ハダデの病氣 (7～9節)

①アラムのベン・ハダデ王 (7)「エリシャがダマスコに行ったとき、アラムの王ベン・ハダデは病氣であったが、彼に『神の人がここまで来ました。』という知らせがあった。」エリシャは何らかの必要でアラムの中心あったダマスコに行ったのです。当時のアラム王はベン・ハダデであったと記されています。預言者エリヤの時代に、サマリヤに攻勢をかけた王 (I列王 20)、またエリシャの時代にサマリヤを包囲した王 (II列王 6:24)と同一人物だと考えられます。そのハダデも今や病氣になっていました。その病がどれほどの状態であったかは不明です。その王の許に、神の人エリシャが来ているという情報が入ったのです。

②ハザエルへの命令 (8)「王はハザエルに言った。『贈り物を持って行って、神の人を迎え、私のこの病氣が直るかどうか、あの人を通して主のみこころを求めてくれ。』」それを聞いたハダデ王は側近のハザエルに言ったのです。神の人エリシャを訪問して、自分の病氣が直るかどうかについて、神の御心を求めてもらえと申し伝えたのです。

③贈り物を携えて (9)「そこで、ハザエルはダマスコのあらゆる物をらくだ四十頭に寄せ、贈り物として携えて、彼を迎えに行った。彼は神の人の前に行って立ち、そして言った。『あなたの子、アラムの王ベン・ハダデが、『この病氣は直るであろうか』と言ってあなたをよこしました。』」ハザエルはダマスコで揃えることができる贈り物を携えて、エリシャの所に向かいました。贈り物をらくだ40頭に載せて行ったというのですから大変な量です。ハダデ王の必死な思いがここに現れています。さて、ハザエルはエリシャの前に立って言いました。「アラムの王ベン・ハダデが病氣に苦しんでいるのですが、この病氣は直るのでしょうか。私はそれを聞くための使者としてやって来たのです。」

2. エリシャの見た幻 (10～12節)

①直ると告げよ (10)「エリシャは彼に言った。『行って、『あなたは必ず直る』と彼に告げなさい。しかし、主は私に、彼が必ず死ぬことも示された。』」ハザエルからの質問を受けて、預言者エリシャは答えました。アラム王には、「あなたは必ず直る」と言いなさい。つまり、ベン・ハダデの病状はどんなであっても、癒される可能性があることが示唆されています。ところが、エリシャは意外なことを付け加えたのです。それは、アラム王ベン・ハダデは必ず死ぬということを示されたというのです。それは神がエリシャに示された事だと言うのです。いったいどういうことでしょう。

エリシャ

エリヤの弟子エリシャが頭角を現したのはこの時期であった。エリシャは師エリヤよりもはるかに重要な政治的役割を果たした。エリシャは2人の王——アラムで1人、イスラエルで1人——を任命し、軍事作戦に関与した。エリシャは事実上、イスラエル王エフーの台頭に際し、中心的な役割を果たした。エフーはエリシャが使者を通じて与えた預言の直接的な結果としてクーデターを起こしたのである (II列王9:1-13)。

エリシャの人生におけるおもな出来事

- ①エリヤの後継者として指名される (I列王19:19-21)。
- ②エリヤと同行中、エリヤが天に上げられる (II列王2:11)。
- ③エリコの水をきよめる (II列王2:19-22)。
- ④ベテルで2頭の熊が、エリシャをのしつた者たちを殺す (II列王2:23-25)。
- ⑤シュネムで、子どもを死からよみがえらせる (II列王4:8-37)。
- ⑥ギルガルで、煮物の毒を消し、パンを増やす (II列王4:38-44)。
- ⑦ナアマンのツアラアトをいやす (II列王5章)。
- ⑧アラム軍の攻撃を察知し、イスラエル軍をドタンからサマリヤへと導く (II列王6:8-23)。
- ⑨サマリヤの包囲解除を預言 (II列王6:24-7:20)。
- ⑩ダマスコへ行き、ハザエルにアラム王になると預言 (II列王8:7-15)。
- ⑪預言者をラモテ・ギルアデへ送り、エフーに対しイスラエル王になることを告げさせる (II列王9:1-10)。



②彼を見つめ (11)「神の人は、彼が恥じるほど、じっと彼を見つめ、そして泣き出したので、」預言者エリシャの反応はこうでした。彼は、ハザエルを食い入るように見つめたのです。それはハザエルが恥ずかしがるほどでした。その後エリシャは泣き始めたとういのです。その涙は、よほど大きな悲しみに遭遇した時に、流されるようなものでした。いったいどうしたのかと周りの者が驚き、心配するほどでもありました。

③イスラエルの人々に害を (12)「ハザエルは尋ねた。『あなたさまは、なぜ泣くのですか。』エリシャは答えた。『私は、あなたがイスラエルの人々に害を加えようとしていることを知っているからだ。あなたは、彼らの要塞に火を放ち、その若い男たちを剣で切り殺し、幼子たちを八つ裂きにし、妊婦たちを切り裂くだろう。』自分の顔や姿をじっと見られたハザエルは率直に尋ねました。「エリシャ様はどうして泣かれるのですか」。エリシャは答えました。彼に与えられ、見えていた幻をエリシャは伝えました。それは、目の前のハザエルがイスラエルの人々に害を加える幻でした。具体的には、①要塞に火を放つ②若い男たちを切り殺す③若幼子を八つ裂きにする④妊婦たちを切り裂く、といったものでした。これらが、心の内に映されていたからこそ、エリシャは泣いたのです。

3. ハザエルがハダデを殺す (5~6 節)

①ハザエルの反応 (13)「ハザエルは言った。『しもべは犬にすぎないのに、どうして、そんなだいそれたことができましょう。』しかし、エリシャは言った。『主は私に、あなたがアラムの王になると、示されたのだ。』」そう言われてハザエルは驚きます。「私は犬ほどの力しかありません。どうして、そんな大それたことができましょう」。エリシャは「主は私に、あなたがアラムの王となると示されたのだ。」と言いました。かつて、エリヤにも主は預言を伝えていました。「さあ、ダマスコの荒野へ帰って行け。そこに行き、ハザエルに油を注いで、アラムの王とせよ。」(I 列王 19:15)。この二人の預言者の内に与えられた預言が成就しようとしているのです。

②王の問い (14)「彼はエリシャのもとを去り、自分の主君のところに帰った。王が彼に、『エリシャはあなたに何と言ったか。』と尋ねると、彼は、『あなたは必ず直る、彼は言いました。』と答えた。」ハザエルはハダデ王の所に戻りました。王は尋ねます。「エリシャは何と言ったのか」。「あなたは必ず直る」と言いました。後半の「しかし、彼は死ぬ」という言葉はエリシャが言う通り、伝えませんでした。

③王の死 (15)「しかし、翌日、ハザエルは毛布を取って、それを水に浸し、王の顔にかぶせたので、王は死んだ。こうして、ハザエルは彼に代わって王となった。」どのような思いの変化がハザエルのうちに生じたかはわかりません。王に報告をした翌日、彼は毛布を取り、水に浸し、それを王の顔にかぶせました。王は死にました。窒息死でありましょう。下剋上です。その結果、ハザエルは権力を自分のものとし、王となったのです。

《結論》

今朝の聖書記事では、国際政治的には大きな出来事が記されています。つまり、長く大小の抗争があったり、ナアマン將軍を通しての交流があったり、列王記の中においては、記述の多いアラムの国に大きな出来事が起きたからです。それも、当のベン・ハダデ王は自らの病の見通しを知るために、エリシャの所に使者を送ったというのです。その使者は信頼する側近ハザエルでした。エリシャはその問いに対する答えには少し困りました。なぜなら、「その病に関しては直るでしょう」と答えるしかないのです。しかし、預言者には主から知らされていました。ハダデ王は死ぬということ。それも、側近ハザエルに殺されるという衝撃的な出来事でした。加えて、そのハザエルが新しい王に着くことになったのですから、アラム国内にとっても、周辺国々にとっても大きな変化が生じたことになるのです。

そちらも興味深いではありますが、今朝は一つの点に注目して結論としたいと思います。それは、エリシャがハザエルと相対した時のことです。エリシャはハザエルをじっと見つめ、そして泣き出したという事実についてです。エリシャは、その理由を問われて、ハザエルがイスラエルに大きな害を加えることが見えているからと応えました。要塞に火が放たれ、若い男も、幼子も、妊婦も残忍な方法で、王となるハザエルに殺されるということが幻として見えているからだと言いました。ここで、エリシャが流した涙は、イスラエルの民に対する熱い思いと、同情、無念などによるものであったでしょう。イスラエルの預言者として立てられたエリシャにとって、霊的牧会を託された民の多くの悲しい出来事を見させられて、胸に迫ってきて、泣くしかなかったのです。

イエス・キリストが涙を流された二つの場面を思い出します。一つはマルタとマリヤの兄弟であるラザロが死んだ時に、主イエスは人間がその罪のゆえに受けるようになった死の事実を前に、霊的憤りを覚えられ、涙を流されたという出来事がありました(ヨハネ福音書11章)。もう一つは、イエスが十字架を前にして、エルサレムへの入城をされる時に、その都のために泣かれているという出来事です(ルカ福音書19:41)。ここで主は敵が取り巻き、四方から攻め落とし、子どもたちを含めた人々に悲惨な出来事が起きることを、幻で見させられて、涙を流されているのです。主の涙には、十字架の出来事をも包括されていたことではありますが、ここでは一義的にこの都にあって、悲しみを味わう民に同情して、涙を流されていると考えられます。

今朝、久しぶりに歌う讃美歌213番はその折り返して、「神の人よ、み恵みときわにあれや」と歌いますが、エリシャは神の人、預言者として、民のことを想い、泣きました。そして、主イエスは民の命の危険のために思いを馳せてくださいました。また、人が永遠の命を得るために、自らの命を投げ出して十字架に上られました。救い主は、私たちの救いのために、今も本当に心配してくださっています。涙を流してくださっています。私たちが救われて、本当の平安と喜びを受けることを願ってくださっています。主イエスのそのお心に思いを馳せ、私たちの内に主が生きて働いてくださる待ち望んでいきましょう。